

伊勢物語

定

鈴木知太郎
田中宗作 編

伊勢物語



桜楓社出版



昭和三十五年四月二十日印刷
昭和三十五年四月二十五日発行
昭和三十七年四月十五日再版

伊勢物語

定価一八〇円

編者

鈴木 知太郎

発行者

田中 宗作

印刷者

南雲 正朗

東京都千代田区西神田二の二九

木村 史郎

発行所

桜 楓 社 出 版

東京都千代田区西神田二の二九

発光元

南雲堂出版株式会社

電話九段

331 八二三六一九

凡 例

一、本書は、大学における教科用図書たることを、主たる目的とし、かねて、国文学に深い関心を寄せられる諸賢の高覧に供するため、編集したものである。

一、本書の本文は、伊勢物語定家本系統のうち、天福本の代表的善本である宮内庁書陵部尚蔵の冷泉為和筆本伊勢物語を底本とし、これと同系統本の学習院大学尚蔵の伝定家筆本、並びに、武田本の代表的善本である岩瀬文庫尚蔵の伊勢物語をもつて校訂したもので、その校異の要は、* 印を附して頭注として摘記した。

一、本書の本文は、講読の便を考えて、かなには適当に漢字を当て、底本には全然ない句読点・濁点・会話の符号等を施し、かつ古写本にありがちなかなづかいの誤り・あて字などは歴史かなづかいの正しいものに改めた。

なお、全巻を通じて誤読のおそれのある漢字には読みがなを傍記した。

一、注は、主として人名・地名・難語句等について施し、簡明を旨として解説を試みたが、紙面が限られているために意を尽さないものが多い。また、理解の一助として本文の中に入れたさし絵八葉は、本居宣長の門人市岡猛彦校訂の「伊勢物語図絵」(三巻・文政八年1825刊)によるもので、その絵は難波の人法橋玉山の筆になるといわれている。そのほか、成立問題にとくに関係が深いと思われる万葉集・勅撰集・私撰集・物語・催馬楽の共通歌については、全部これを頭注に掲出して参考に供することにつとめたが、古今集左注・大和物語のご

とく長文にわたるものは、巻末に参考資料の項を設けて、その全文を附載した。

一、巻末に、参考図録、並びに和歌索引等を附載して、講読の際に十分活用できるように考慮した。

二、附録の業平集は、数多い業平集の中でも注目すべき資料であつて、伊勢物語とはきわめて関係の深いものである。今回、とくに、宮内庁書陵部の允許を得て原文を忠実に翻刻することとした。その概要については、業平集解説の項を参照されたい。

一、本書の成るについては、先進諸賢の学恩によることかはなはだ大きい。また、底本に為和本を用い、業平集を翻刻して参考に供し得たのは、ひとえに宮内庁書陵部のご厚意によるものである。あわせてここに深甚の謝意を表する次第である。

昭和三十五年三月二十五日

編 者 識

もくじ

図葉	(1) 為和筆本伊勢物語		巻頭
同	(2) 桂宮本業平集		同
凡 例			一
本文細目			二
本 文			一
参考資料			九
参考図録			金
和歌索引			六
附録・業平集（なりひら）			九

本文細目

〔内容その他〕のことは五十嵐篤好の遺著『伊勢物語語披雲』の
第一卷所載の「編次標目」による。

〔章段〕	〔冒頭の句〕	〔内容その他〕	〔歌数〕	〔ページ〕
1 昔、男、うひかうぶりして、		初冠して春日の里にいく	2	一
2 昔、男ありけり。奈良の京は離れ、			1	一
3 昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、			1	二
4 昔、東の五条に、おほきさいの宮おはしける、			1	二
5 昔、男ありけり。東の五条わたりに、		二条后まだたにおはしましける時もの聞え さす	1	四
6 昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、			1	四
7 昔、男ありけり。京にありわびて、			1	六
8 昔、男ありけり。京や住み愛かりけん。			1	六
9 昔、男ありけり。その男、身をえうなき……			4	六
10 昔、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。		東下り道の記の如し陸奥まで至りてかへれり	2	九
11 昔、男、東へゆきけるに、			1	一〇
12 昔、男ありけり。人のむすめを盗みて、			1	一〇

- 13 昔、武蔵なる男、京なる女のもとに、
 14 昔、男、陸奥国にすずろにゆきいたりにけり。
 15 昔、陸奥国にて、なでうことなき人の妻に……！
 16 昔、紀有常といふ人ありけり。
 17 年ごろ訪れざりける人の、
 18 昔、なま心ある女ありけり。
 19 昔、男、宮仕へしける女の方に、
 20 昔、男、大和にある女をみて、
 21 昔、男女、いとかしこく思ひかはして、
 22 昔、はかなくて絶えにける仲、
 23 昔、みなかわたらひしける人の子ども、
 24 昔、男、かたるなかに住みけり。
 25 昔、男ありけり。あはじともいはざりける女の、
 26 昔、男、五条わたりなりける女を、
 27 昔、男、女のもとに一夜行いて、
 28 昔、色好みなりける女、出でていにければ、

紀有常の妻あまになりて出てゆく

女誰ともしられず

女は紀有常の娘なる事古今集に見ゆあま雲の
うた

女誰ともしられず此中につゝあつゝの条あり
(注、筒井筒は二三段)

二条后を得ずなりしを嘆きたり

女誰ともしられず

1	2	1	2	4	5	4	7	2	2	2	2	4	1	3	2
二三	二三	二二	二二	二一	一八	一七	一六	一五	一五	一四	一四	二三	二二	一一	一一

29 昔、春宮の女御の御方の花の賀に、
 30 昔、男、はつかなりける女のもとに、
 31 昔、宮の内にて、ある御達の局の前を……
 32 昔、もの言いひける女に、年ごろありて、
 33 昔、男、津の国、菟原の郡に通ひける女、
 34 昔、男、つれなかりける人のもとに、
 35 昔、心にもあらで絶えたる人のもとに、
 36 昔、「忘れぬるなめり。」と、問ひごとしける……
 37 昔、男、色好みなりける女にあへりけり、
 38 昔、紀有常がりいきたるに、
 39 昔、西院のみかどと申すみかどおはしましけり。
 40 昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。
 41 昔、女はらからふたりありけり。
 42 昔、男、色好みと知る知る、女をあひいへりけり。
 43 昔、賀陽親王と申す親王おはしましけり。
 44 昔、あがたへゆく人に、むまのはなむけせんとて、

二条後の花賀

女誰ともしられず

有常がりいきたる

崇子内親王うせ給ひし葬送を見る

女誰ともしられず

妻の妹夫の姿をはりやりたり

女誰ともしられず

賀陽親王のつかひ給ひける女にものいふ

親族のものがあがたへゆく馬のはなむけす

1 3 1 1 1 2 2 2 1 1 1 2 1 1 1 1

三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二六 二五 二五 二五 二四 二四 二四 二三 二三

45 昔、男ありけり。人の娘のかしづく、

46 昔、男、いとうるはしき友ありけり。

47 昔、男、ねんごろに、いかでと思ふ女ありけり。――

48 昔、男ありけり。むまのはなむけせんとて……―

49 昔、男、妹のいとをかしげなりけるを……

50 昔、男ありけり。恨むる人を恨みて、

51 昔、男、人の前栽に菊植ゑけるに、

52 昔、男ありけり。人のもとよりかざりちまき……

53 昔、男、あひがたき女にあひて、

54 昔、男、つれなかりける女に……

55 昔、男、思ひかけたる女の、

56 昔、男、ふして思ひ、起きて思ひ、

57 昔、男、人知れぬもの思ひけり。

58 昔、心づきて色好みなる男、長岡といふ……

59 昔、男、京をいかが思ひけん、

60 昔、男ありけり。宮仕へいそがしく、

あはぬ女のうせし忌にこもりてゆく螢のうた
よむ

善友の他國へいきたるより文おこせたり

女たれともしられず

紀利貞の馬のはなむけなる事古今集にてしる

妹のをかしげなるを見りてうたよむ

女たれともしらず

長岡に家作りであり

東山住まむと思ひ入りて住わびぬのうたをよむ

2
三
一

1

2
三三三

1

2
—
—
—
—
—

5

1
三四

1
三四

1
三五

1
三五

1
三五1
三五1
三五3
三六2
三六

111

- 61 昔、男、筑紫までいきたりけるに、
 62 昔、年ごろ訪れざりける女、
 63 昔、世心つける女、いかで心情あらん……
 64 昔、男、みそかに語らふわざもせざりければ、
 65 昔、おほやけおぼして使うたまふ女の、
 66 昔、男、津の国にしる所ありけるに、
 67 昔、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、
 68 昔、男、和泉の国へいきけり。
 69 昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の……
 70 昔、男、狩の使より帰り来けるに、
 71 昔、男、伊勢の斎宮に、
 72 昔、男、伊勢の国なりける女、またえあはで、
 73 昔、そこにはありと聞けど、
 74 昔、男、女をいたう恨みて、
 75 昔、男、「伊勢の国に率ていきてあらん。」と……
 76 昔、二条の後の、まだ春宮のみやすん所と……

宇佐の使にて筑紫までいきたり此中に橘のう
たあり

女誰ともしられず此中つくも髪の女の所に在
五中將といへり

二条後の事をいへり放縦不拘さまをかたる

兄弟友たちかきつらねて難波いづみ逍遙しあ
るく

伊勢国へ狩の使にきたるよりかへるまで

女たれともしられず

二条后大原野詣

1 4 1 1 1 2 1 3 1 1 1 5 2 2 2 2

四九 四九 四九 四八 四八 四八 四七 四五 四五 四四 四四 四一 四一 三九 三八 三七

77 昔、田邑のみかどと申すみかどおはしましけり。――
 78 昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり。――
 79 昔、氏のなかに親王生まれたまへりけり。――
 80 昔、おとろへたる家に、ふちの花植ゑたる人……
 81 昔、左の大臣いまそかりけり。――
 82 昔、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。――
 83 昔、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、――
 84 昔、男ありけり。身はいやしなから、――
 85 昔、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、――
 86 昔、いと若き男、若き女をあひいへりけり。――
 87 昔、男、津の国、菟原の郡、葦屋の里に……
 88 昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だち……
 89 昔、いやしからぬ男、われよりはまさりたる……
 90 昔、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、――
 91 昔、月日のゆくをさへ嘆く男、――
 92 昔、恋ひしさに来つつ帰れど、――

女御多賀幾子うせ給ひて四十九日の御わざ安
 祥寺にてし給ふに
 山しなの御師のみこを大將常行とひ奉る
 貞数親王生れ給ふ行平朝臣の女のはら也
 藤の花を折りて人に奉る
 川原院にて塩かまのうたよむ
 惟喬親王の御供にて水無瀬にゆきたり
 小野の宮をとぶらひ奉るまで
 伊豆内親王より文おこせ給ふ
 むつき小野の宮をとひ奉る
 女誰ともしられず
 津国葦屋の里に住みけるを行平朝臣とひて布
 引の滝を見にゆく
 老ゆくを嘆きて大かたは月をもめでじのうた
 をよむ
 われよりまさりたる人をおもふ
 女たれともしられず

1 1 1 1 1 4 1 1 2 2 6 1 1 1 1 1 1

五〇 五一 五三 五三 五三 五四 五四 五七 五八 五九 六〇 六〇 六二 六三 六三 六三 六三

93 昔、男、身はいやしくて、いとになき人を……
 94 昔、男ありけり。いかがありけん、
 95 昔、二条のきさきに仕うまつる男ありけり。
 96 昔、男ありけり。女をとかくいふこと……
 97 昔、堀河のおほいまうちぎみと申す、
 98 昔、おほきおほいまうちぎみときこゆる、
 99 昔、右近の馬場のひをりの日、
 100 昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、
 101 昔、左兵衛督なりける在原行平といふありけり。
 102 昔、男ありけり。歌はよまざりけれど、
 103 昔、男ありけり。いとまめにじちようにて、
 104 昔、異なることなくて厄になれる人ありけり。
 105 昔、男、「かくては死ぬべし。」と言ひやり……
 106 昔、男、親王たちの逍遙したまふ所にまうでて、
 107 昔、あてなる男ありけり。その男のもと……
 108 昔、女、人の心を恨みて、

| | | | | | | | | | | | | |

女は良相公の女なるべし秋のよは春日わする
 のうた
 二条后につかうまつる女にものいふ
 女誰ともしられず男天のさかてを打てのろふ
 基経朝臣の四十の賀
 自房朝臣へ梅花の作り枝に雛子をつけて奉る
 右近馬場のひをりの日
 後涼殿のはざまをわたりけるに忘草を出した
 所
 行平朝臣の家に藤原良近来るあやしき藤の花
 あり
 親族なるもの、厄に成りて在るかたへそむく
 とてうたをやる
 仁明天皇の御子たちのつかひ給ふ女にものい
 ふ
 女誰ともしられず
 立田田にてからくれために水くゝるとはのう
 たよむ
 藤原のとしゆき業平朝臣の家に侍りける女に
 ものいふ
 女誰ともしられず

1 3 1 1 2 1 1 1 2 1 1 1 1 2 1

七三 七二 七一 七一 七〇 七〇 六九 六八 六八 六七 六七 六五 六五 六四 六四

125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109

昔、男、友だちの人を失へるがもとに……
 昔、男、みそかに通ふ女ありけり。
 昔、男、やむごとなき女のもとに、
 昔、男、ねむごろに言ひ契りける女の、
 昔、男、やもめにてゐて、
 昔、仁和のみかど、芹河に行幸したまひける時、
 昔、陸奥の国にて、男女住みけり。
 昔、男、すずろに陸奥の国まで惑ひいにけり。
 昔、みかど、住吉に行幸したまひけり。
 昔、男、久しくおともせで、
 昔、女の、あだなる男のかたみとて……
 昔、男、女のまだ世経ずとおぼえたるが、
 昔、男、梅壺より雨にぬれて、
 昔、男、契れること誤れる人に、
 昔、男ありけり。深草に住みける女を、
 昔、男、いかなりけることを思ひけるをり……
 昔、男、わづらひて、こち死ぬへおぼえければ、

花よりも人こそあだにのうた是は古今集にて
紀茂行のうた也

女たれともしられず

芹川行幸は行平鷹飼つかうまつる

おきのゐてのうた古今集にて小野小町のうた
也

女誰ともしられず

住吉行幸大袖現形

女誰ともしられず古今集なるよみ人しらずの
うたなど也

深草の里に住みける女のあまかたにや思ひけ
むうたよめる

おもふこといはずにたにといへる述懐

つひにゆく道とはのうた

1 1 2 1 2 1 1 1 2 1 1 1 1 1 3 1 1

七三 七三 七四 七四 七四 七五 七五 七五 七六 七六 七六 七六 七六 七六 七六 七八 七八

金華 玉照大王御書

陽明文庫

東玉 玉照大王御書

○うひかうぶり(初冠)―元服。

○しるよしして―領地があるというゆかりによつて。

○なまめいたる―若々しく美しい

○かいまみてけり―「かいまみ」は「里カキ間見」の音便。物のすき間から、のぞき見をすること。

○おもはず―思ひがけなく。いとはしたなくて。―にかかる。

○古里―旧都奈良を指すものとみられるが、「古」には「さびれた」意が兼ねさせてある。なお「なじんだ土地」を「古里」ともいう。

○はしたなくて―中途半端な、不似合な様子で住んでいたの。

(一)古今六帖五に同じ歌がある。

○おひつぎて―すばやく。

(二)古今集恋四に「題しらず―河原左大臣」として第四句「乱れんと思ふ」の類歌があり。六帖五には同じ歌がある。

*むかし人は―むかしは(武)

○いちはやし―たいへん烈しい。

○奈良の京は―桓武天皇の延暦十三年長岡の京から平安京に移ったが、長岡の京はわずか十年で終わったためかようにいったもの。○西の京―右京。

伊勢

物語

(一) 昔、男、うひかうぶりして、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。おもはず、古里にいはしたなくてありければ、ここちまどひにけり。男の着たりける狩衣のすそを切りて、歌を書き

てやる。その男、しのぶずりの狩衣をなん着たりける。

(二) 春日野の若むらさきのすり衣しのぶの乱れかぎり知られず

となんおひつぎていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけん。

(三) 陸奥のしのぶもちずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人はかくいちはやきみやびをなんしける。

(三) 昔、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まら

ざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。

○まめ男―誠実な男。情の上で実意を持った男の意。

○いかが思ひけん―「やりける」にかかる。

○ついたり―「月立ち」の転。ここは、上旬の意。

○そをぶる―一般に「ソボフル」というが、古くは「ソヲブル」「ソヲフル」とも、いったらしい。日仏辞書にも *Sowofourou* とある。雨がしとしとと降る。

(三)古今集悉三に「やよひのつゐたちより、しのびに人にものを言ひてのちに、雨のそほ降りけるによみてつかはしける―業平朝臣」として同じ歌があり、新撰和歌四並びに古今六帖一・五(重出)にも同じ歌がある。

○ひじきも―「鹿尾菜」の字をあてる。今の「ひじき」をいう。褐藻類の海藻で、浪の荒い海岸の岩石に生育する。

(四)大和物語 一六一段前半(八二ページ参照)

○二条のきさき―藤原良長の娘高子。貞観八年清和天皇の女御として入内。陽成天皇の御母。

○ただ人―入内以前の普通の身分をいう。臣下の身分。

それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかが思ひけん、時はやよひのつゐたち、雨そをぶるにやりける。

(二) 起きもせず寝もせて夜をあかしては春のものとてながめ暮しつ

(三) 昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじきもといふものをやるとて、

(四) 思ひあらばむぐらの宿に寝もしなんひじきものには袖をしつつも

二条のきさきの、まだみかどもつかうまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。

(四) 昔、東の五条に、おほきさいの宮おはしける、西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはあらで、こころざし深かりける人、ゆきとぶら

ひけるを、むつきの十日ばかりのほどに、ほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつ

○東の五条に―「住む人ありけり」にかかると。
 ○おほきさいの宮―藤原冬嗣の女順子、仁明天皇の皇后、文徳天皇の御母。
 ○本意にはあらで―訪れることをさしひかえるべきだと思ひながら、やはり訪ねずにはいられなかつた心持をいつたもので、「行きとぶらひけるを」にかかると。なお、この語の解釈と、かかり所については諸説がある。
 ○ゐて見―すわつて見たりして。
 ○あばらなる板敷―戸、障子などのない板敷の間。
 (五)古今集恋五に「五条のきさいの宮の西の対に住みける人に、はいにはあらでものいひわたりけるを、むつきの十日あまりになんはかへ隠れにける。あり所は聞きけれどもえものもいはで、またの年の春、梅の花盛りに、月のおもしろかりける夜、こそを恋ひてかの西の対にいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる―在原業平朝臣」として同じ歌がある。
 ○月や―「月や」「春や」の「や」はいずれも反語か。

伊勢物語

なんありける。またの年のむつきに、梅の花盛りに、去年を恋ひていきて、立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

(五)
 月やあらぬ春や昔の春
 ならぬわが身ひとつは
 もとの身にして

